

『ブライズデイル・ロマンス』に描かれた 女権拡張運動への共感

渡 辺 佳 余 子

Nathaniel Hawthorne (1804-64) は、19世紀の前半を生きたアメリカロマンティズム時代の作家である。由緒あるピューリタンの家系出身で、祖先には魔女裁判で裁判官を勤めたものもいた。1837年に短編集、*Twice-Told Tales*を出版し、作家として本格的な活動を始めた。ホーソーンは、ピューリタニズムと関わっていたために、人間の罪や罰に関心を持ち、作品の中でも人間心理を深く追求した。1842年に結婚し、Ralph Waldo Emerson (1803-82) の住家であった「旧牧師館」に移った。1849年には、3年間勤務したセイレムの税関の職を失ったが、代表作である*The Scarlet Letter* (1850) を完成させたことで、作家としての地位を確立した。この『緋文字』に引き続いて翌年には、*The House of the Seven Gables* (1851) が、そして、1852年には、本稿で論じる*The Blithedale Romance*が出版された。

この小説は、ホーソーンが、1841年に婚約者Sophiaと共に、社会主義者たちによるユートピア共同体である実験農場、Brook Farm (1841-47) に参加したときの体験に基づいて書かれたものであり、当時、実際にあった社会主義運動のことが知れる点においても興味あるものになっている。しかし、この『ブライズデイル・ロマンス』(以下、BRと略記する)が、多くの批評家に「三流作品」であると指摘されていることは良く知られている¹⁾。筆者が分析したノートン版BRの前書き(編者、Seymour GrossとRosalie Murphyによる)にも、“a long period of neglect”と多くの批評家たちが長い間「無視」し続けたことや、“the slightest and most colorless of the novels”と酷評されたことが述べられている。また、このような状況にあったBRだったが、出版されてから約100年経った1950年代になって、批評家たちが注目し始めた経緯も述べられている。

確かに、語り手Miles Coverdaleの中途半端な態度を始めとして、登場人物たちの描かれ方も曖昧な域を脱せず、傑作とされる『緋文字』に比較しても、失敗作であることは否めない。しかし、魅力の感じられない中心人物たちの中で、唯一、読者の心を捉える、光り輝いている女性がいる。Blithedale実験農場(Brook Farmをモデルにしている)への参加者の一人、Zenobiaである。この魅惑的な女性ゼノビアは、結局は、作品の終わり近くで入水自殺をしてしまうのであるが、それにもかかわらず、いつまでも読者の心に深い印象を刻み続ける人物であるように思われる。本稿では、このゼノビアの魅力を分析し、ホーソーンがBRに彼女を登場させた意図について論じる。

初めに、この作品の概要を述べる。洗練された都会の町ボストンの喧騒を離れて、農業に従事しながら理想的な世界を建設しようという目的で、Blithedale(幸福の谷という意味)に理想主義者たちが集まる。創始者であり指導的な立場にあったHollingsworthという男性と、この男性に恋する二人の女性、ゼノビアとPriscillaとの三角関係が描かれ、結局この人間関係のもつれから、理想に燃えた実験農場の建設も失敗に終わるというものである。失敗作と酷評される原因としては、恋のライバルとなるこの二人の女性が実は、異母姉妹であったこと、当時流行した催眠術の実験、女性の自殺というように、ゴシック小説に似たプロットをあこれ持ち込んで読者の関心を引こうと

したことにあると思われる。さらに、読者の目からも観察眼は誠に疑わしく見える、自己を自嘲的に“I am only a poet, and, so the critics tell me, no great affair at that!”²⁾と分析する「三流詩人」カヴァディルを語り手に採択したことにある。冴えない独身男である彼が恋敵と憎むようになる、2人の女性に愛されるホリングズワスも“Miles Coverdale is not in earnest, either as a poet or a laborer” (63) と、何事においても打ち込むことのできないカヴァディルに批判的である。カヴァディルの語りが「自己欺瞞に基づいている」と断言する批評家もいる。³⁾しかし、前述したようにホーソーン自身が実生活でこのような実験農場での生活を体験していること、カヴァディルが詩人と自称していることから、この悪評高き語り手が、ホーソーン自身の心情を代弁していると考えることができる。したがって、批評家たちが酷評する語り手カヴァディルの言動を分析することで、ホーソーンが本作品で伝えようとしたことはどのようなことであったのかが見えてくるだろう。

1) 隠遁者カヴァディルと実験農場の指導者ホリングズワス

都会の喧騒を離れた後の実験農場での生活においても、何事にも熱心に打ち込むこともできないように見えるカヴァディルは、“……am really getting to be frosty bachelor, with another white hair, every week or so, in my moustache” (9) と自らを自嘲的に述べていることから、長年独身生活を続け、気ままに生きている。したがって、まさに「宙ぶらりんの男」(大井 200) と批判されても仕方がない。このような語り手カヴァディルについての評価は厳しい。彼に対する酷評をKeith Carabine は、3つに分類されるだろうと述べている。カヴァディルが、“literary snoop” (せんさく好きな物書き) であり、“not to be trusted” (信用できない人) であり、“……is treated ironically by Hawthorne throughout the narrative” (ホーソーンが、彼を作品の始めから終わりまで皮肉っぽく描いている) ことであるという⁴⁾。また、Nina Baymもこのような批評をした一人であるが、加えて、“[he] is not deeply interested in the community’s economic aims, for as a man of means he feels little tie to the working classes”⁵⁾と述べて、有閑階級のカヴァディルが実験農場に参加してはみたが、この社会主義運動に対しても積極的に関わることができなかったと指摘している。

しかし、このような悪評の嵐の中で、カラバインは、“Such readings are altogether too simple”と批評家たちに警告し、“Coverdale allows Hawthorne to dramatize his own troubled, ambivalent perceptions of the artist’s role and function” (180) と述べ、ホーソーンが、作家としての役割や果たすべき機能についての苦悩を、語り手カヴァディルを通して描こうとしたのであると反論している。まさに、批評家たちから長い間無視され、冷たく扱われてきた本作品が、その悪名高き語り手であるカヴァディルの発言や行動と、作家ホーソーンとの微妙な類似性に注目するとき、作家から読者に重要なメッセージを伝えようとしていることがわかる。

一方、社会変革という高い志を持つ力強い指導者として描かれるホリングズワスは、「熊」にたとえられ、体毛が濃く、都会暮らしが似合うひ弱なタイプのカヴァディルとは正反対のイメージで描かれ、男性性が強調されている。この理想に燃え、リーダーシップにあふれた男性に、ゼノビアとブリシラの二人ともが恋する。ブライズデイルという実験農場は、ホーソーンが実際に参加したブルックファームという社会主義農場運動での体験を基にしているものだから、指導者としては、George Ripley (1802-80) という実在の人物がいた。ホリングズワスとリプリーがどの程度似せて描かれたものかどうかは定かではないが、「作家」であり実験農場に参加した頃は独身であったという点だけに注目しても、語り手カヴァディルの中にホーソーンが自分自身を投影させて描いたに違いないということは想像できる。良く知られているように、ホーソーンは、決してホリングズワ

スのような遅いタイプの男性ではなく、むしろ、女性的な外見をしていた。そして、カヴァディルもまた、外見だけではなく、精神的にもホリングズワースとは対極にある「女性化」⁶⁾ していた存在であったと言える。ホーソーンが自分には欠損しているものをホリングズワースに描き、彼を女性たちから憧れられる存在として描いていることは、カヴァディル同様の「自嘲」が想像できる。

ホーソーンが、*BR*を執筆したのは、約150年前、ヴィクトリア時代のアメリカにおいてであった。この頃から1世紀後の20世紀中葉、それまで差別され続けたアメリカの黒人を初め、劣等の性であるというレッテルを貼られることに甘んじていた世界中の女性たちが、公に抗議の声を発した。差別撤廃運動を通して、表面的にはあっても、ようやくアメリカ黒人や先住民、そして女性たちへの差別がない時代の到来を迎えた。従って、21世紀の今では、男女の社会での役割を分類することや、女性を従属的な立場に置くことは時代遅れとみなされるようになった。

しかし、ホーソーンが生きた時代にもまた、女性差別に反対する運動はあった。先進的な女性たちは、当時の男性たちが主張していた、“The Cult of True Womanhood”「真の女性らしさ」という女性への呼びかけに異議を唱えた。Carroll Smith-Rosenbergは、ヴィクトリア時代のアメリカにおけるジェンダー論を*Disorderly Conduct*という大著にて展開しており、この「真の女性らしさ」についても頻繁に言及している。同書、1章の“Hearing Women’s Words: A Feminist Reconstruction of History”においては、次のように述べられている。

…the new bourgeois men of the 1820s, 1830s, and 1840s formulated the Cult of True Womanhood, which prescribed a female role bounded by kitchen and nursery, overlaid with piety and purity, and crowned with subservience.⁷⁾

当時の男性たちは、台所仕事や母親業に専心し、信心深く、貞節で、男性に対して従属して生きることこそが女性の生きる道だと考えていた。しかし、スミス-ローゼンバーグは、同書2章の“The Cross and the Pedestal: Women, Anti-Ritualism, and the Emergence of the American Bourgeoisie”において、この「真の女性らしさ」から逸脱していた女性たちがいたことも指摘している。

Ironically, during the very years when the new bourgeois men began to proselytize for the confining Cult of True Womanhood, wild, religious women created a public and powerful role for themselves as a female conscience and moral voice crying in a wilderness of male corruption. (130)

スミス-ローゼンバーグは、同書においてホーソーンについては一度だけ言及している。彼女は、19世紀の女性作家たちが、ホーソーンが活躍していたと同時期に、同じように作品を書いていたことだけではなく、一般の女性たちも手紙や日記を書きながら女性同士の交流を続けていたことを、“Nineteenth-century women were, as Nathaniel Hawthorne reminds us, damned scribblers. They spoke endlessly to one another in private letters and journals” (45) と述べている。ホーソーンが「あの忌々しい物書き女達」と、同時代の女性作家たちを批判したことは余りに有名である。

倉橋洋子も論じているように、ホーソーンが*BR*を出した1850年代は、女性作家が当時の大衆市場で書籍の販売数においては、圧倒的に男性作家よりも勝っていた。アメリカでは、ホーソーンの『緋文字』が7,800部印刷されたのに対して、Susan B. Warner の*The Wide Wide World*は1年たらずで4万部以上売っているという。⁸⁾

ホーソーンが、同業の女性作家たちについて感じていたことを、*BR*においてどのように描いたのかは後述するが、当時一般的に受けいられていた「真の女性らしさ」にホリングズワスも同調していたことが、第14章“Eliot’s Pulpit”で明らかになる。ホリングズワスと、彼に恋した先進的な女性ゼノビアとの間で、男女の役割についての核心に迫るような会話が交わされる。ゼノビアが、19世紀に生きた女性として、「真の女性らしさ」を求められていたことに不満を抱いていることが記されている。

……she declaimed with great earnestness and passion, ……on the injustice which the world did to women, ……not allowing them, in freedom and honor, and with the fullest welcome, their natural utterance in public. (111)

女性が公の場でスピーチをすることは許されはてはいないが、いつかは、女性を解放するために、発言したいという意思について、“If I live another year, I will lift up my own voice, in behalf of woman’s wider liberty”と述べる。この後、ゼノビアとカヴァディルの間で女性の立場についての小競り合いのような場面が続き、静かに聴いていたプリシラがホリングズワスに二人のどちらかが正しいのかと質問すると、彼は「二人ともまちがっている」と答える。すると、ゼノビアは“Do you despise woman?”と問い詰め、彼の答えを予測したかのように“Ahh, Hollingsworth, that would be most ungrateful!”と絶望して叫ぶ。

ホリングズワスは、即座に“Despise her?—No!”と否定するのだが“*She is the most admirable handiwork of God, in her true place and character. Her place is at man’s side.*” (113) と答え、このセリフから、彼が女性を男性の隷属的存在であるとみなしていることがわかる。さらに、ホリングズワスが女性蔑視の思想に囚われてることが明らかになる。

……if there were a chance of their attaining the end which these petticoated monstrosities have in view, I would call upon my own sex to use its physical force, that unmistakable evidence of sovereignty, to scourge them back within their proper bounds! (114)

ホリングズワスは女性を「ペチコートをはいた化け物たち」と呼び、彼女たちが「正しい領域」から逸脱するようときには、腕力を使ってその領域に押し戻すとまで言っている。さらに、「そのようなことをする必要もないだろう」と結論づけて、“The heart of true womanhood knows where its own sphere is, and never seeks to stray beyond it!” (114) と、「真の女性らしさ」という表現を使いながら、女性を劣等な性とみなしていることが明らかになる。

このようなホリングズワスに加えて、Westerveltと Moodi老人という男性も登場する。ウェスターヴェルトは、ゼノビアの元夫であり、プリシラを使って催眠術を見せる芝居を演出して、金儲けをする詐欺師のような存在であり、ムーディ老人は、ゼノビアとプリシラの父親である。ウェスターヴェルトは、蛇の頭の杖を持ち、ムーディ老人は、ゼノビアがプリシラにさげすんだ視線を投げると、“shook his uplifted staff” (82) と持ち上げた杖を振り回す。ホリングズワスが、もと鍛冶屋であること（鉄をたたくハンマーは杖と同様の役割）などから、長妻由里子が指摘するように、これ等3人の男性は、「ファルスを象徴するシンボルを身につけて」(12) いることから男性的な存在として描かれていると言える。

しかし、カヴァディルは、このような男性性に満ちた3人の登場人物とは対照的に描かれている。14章、“Eliot’s Pulpit”で、ゼノビアとホリングズワスとの男女の役割についての激しい討論が交わされる前に、冗談を交えながらも、カヴァディルは、“……how sweet the free, generous

courtesy, with which I would kneel before a woman-ruler!”と語り、女性の指導者についても拒否反応は持っていない。ゼノビアは、“……if she were young and beautiful,……how if she were sixty, and a fright?”とからかうのだが、それに対して、“Ah; it is you that rate womanhood low”と女性の美德が若く美しいことにあるというようなゼノビアのコメントを批判するのである。

さらに、カヴァディルは、23章“Blithedale Pasture”で、“I see in Hollingsworth an exemplification of the most awful truth in Bunyan’s book of such;—from the very gate of Heaven, there is a by-way to the pit!”(224)と述べ、理想主義に燃えて、実験農場を指導していたホリングズワスが、実際は、欺瞞的で嘘に満ち、地獄へと落ちる可能性もあると激しく非難していることから、むしろ男性性の象徴のような人物を受けいれていない。

読者から見れば、ホーソーン自身の影がちらつくカヴァディルの方が、はるかに魅力的に思えるのだが、何故、女性を蔑視して、粗野で少しも惹かれる要素がないように思われるホリングズワスに、限りなく魅力的なゼノビアが恋して、さらに、異母姉妹であるプリシラと恋敵として彼の争奪戦を展開するようになるのかが、BRにおける最大の謎である。その上、ゼノビアは妹に恋人を奪われた精神的ショックからか、入水自殺をする。ゼノビアが自殺した後、ホリングズワスは、プリシラと結婚するのだが、ゼノビアの自殺に対する罪悪感に苛まれ、また、犯罪者の更正という社会運動にも自信喪失し、廃人ようになってしまう。若き妻のプリシラは、このような彼に寄り添って、逆に保護者のような立場になっている。

2) ゼノビアとプリシラ

既に述べたように、女性や黒人を初めとする差別されていた人たちが本格的に人権を獲得するようになったのは、20世紀の後半1960年代になってからである。しかし、19世紀の中ごろには、超絶主義者で女性の社会改革者であるMargaret Fuller (1810-50) に代表されるような、女権拡張運動の指導的立場にあった女性がいた。フラーは、BRが出版された1852年の7年も前の1845年、*Woman in the Nineteenth Century* を出版し、男女同権論を展開した。このような女性の指導者たちに導かれて、1848年の7月には、ニューヨーク州のセネカ・フォールズで初めて、女性の権利大会が開催された。

BRが、このような社会状況にあった時期に書かれたものであることは、ホーソーンもまた当時の女権拡張運動についてあれこれ思いをめぐらしていたに違いない。ニナ・ベイムは“Unquestionably Hawthorne does not think much of Zenobia as a feminist” (354) と述べ、彼がゼノビアのことをフェミニストとしては考えていないと言っているのだが、14章“Eliot’s Pulpit”で描かれるゼノビアは明確にフェミニストである。

一方、プリシラはひ弱で従順でおとなしく、男性から見れば保護してやりたくなるような、家庭の天使にふさわしい女性のように描かれている。ホーソーンがこのような女性に少しも魅力を感じていないであろうことは、プリシラの全く魅力的でないような描き方に表れている。自分では、何もできない依存性の強い彼女は、批評家からは、売春婦であった過去があると指摘する者も少なくない(ニナ・ベイム 361,364)。

ゼノビアは多額の遺産を相続していたために、ホリングズワスは彼女の遺産を騙し取る。その上、彼が従順なプリシラと結婚しようとしたために、金と愛の両方を失った女権拡張論者ゼノビアは、近くの川で入水自殺をして果てる。その後、カヴァディルは、街に戻り独身生活を続けるのだが、最後にプリシラが好きだったと告白してBRが幕を閉じる。この最終章“Miles Coverdale’s Confession”は、ホーソーンが作品が完成してから後になって付け足した章である。(BR 225 注)

読者の目には、カヴァディルがゼノビアの魅力の虜になっていたとしか思えないために、この告白は唐突な感じが否めない。そして、Philip Rahvが指摘しているように、“It is evident on every page that the only genuine relationship is that of Coverdale to Zenobia; the rest is mystification”⁹⁾ フィリップ・ラーヴは、さらにカヴァディルがゼノビアの魅力に“infatuate”「酔いしれて」しまうのであるが、自分に自信がないために、“psychological detour”の道を取って、大した魅力もないプリシラへの愛を告白する姿は、“convenient self-deception”であると自己欺瞞に満ちた無意味な告白だと分析している。

したがって、カヴァディルの最後の告白は「嘘」であることが明白で、彼が男性に従順で依存体質のプリシラではなくて、女権拡張運動に燃えるゼノビアに恋したということが、BRにおける重要なメッセージを伝えているのである。

3) カヴァディルのゼノビアへの愛

カヴァディルは、ゼノビアに会った途端に、彼女の魅力の虜になったように思われる。実験農場で参加者たちを出迎えたゼノビアは、“a fine, frank, mellow”な声を持ち“very soft and warm”な手で握手を交わしてくれる。彼女は、一人一人に声をかけ、カヴァディルには、“I have long wished to know you, Mr. Coverdale, and to thank you for your beautiful poetry, some of which I have learned by heart” (14) と、詩人のプライドをくすぐるような賛辞を与えてくれる。全てに自信がなさそうに見えるカヴァディルにとって、ゼノビアの暖かい言葉は、強く勇気づけてくれるものだったに違いない。

ゼノビアの衣装についての、“……was dressed as simply as possible, in an American print” (15) という描写には、彼女が19世紀を生きた活発なアメリカン・ガールの一人であったように思われる。¹⁰⁾ さらにカヴァディルは、ゼノビアについて次のように述べる。

Her hair – which is dark, glossy, and of singular abundance – was put up rather soberly and primly, without curls, or other ornament, except a single flower. It was an exotic, of rare beauty, and as fresh as if the hot-house gardener had just clipped it from the stem. That flower has struck deep root into my memory. I can both see it and smell it, at this moment. So brilliant, so rare, so costly as it must have been, and yet enduring only for a day, it was more indicative of the pride and pomp, which has a luxuriant growth in Zenobia’s character, than if a great diamond had sparkled among her hair. (15)

(下線 筆者)

実験農場に参加してから10年近く経ても尚、黒髪に新鮮な花をさしているゼノビアの圧倒的な美しさが、記憶に鮮明に残っているのだ。カヴァディルは、このようなゼノビアには、“a man might well have fallen in love with her for their sake only” (15) と、男ならば恋に落ちてしまいそうと語る。

長妻由里子は、カヴァディルがあちらこちらで覗き見をする行為は、「ゼノビアやプリシラを所有し、支配したいという欲望を顕にするものだ」と言い、彼の視線が、結局はホリングズワースやウェスターヴェルトと質が同じと述べているが (15)、既に述べたように、他の3人の男性登場人物とカヴァディルは、全く質的に異なっている。何事にも消極的で自信なげなカヴァディルは、美しく生き生きとして、女権運動拡張家のゼノビアに純粋に憧れ、そして恋に落ちたのだ。

ニナ・ベイムは、ゼノビアを “who unites in her person sex, art, and nature, is its perfect

symbol……in addition, she is politically radical” (353) と分析し、彼女が、女性として魅力的であることに加えて、政治的にも先進的であると指摘している。カヴァディルは、このようなゼノビアに恋する一方で、このような情熱的な女性とは余り関わらない方が良くと尻込みをしたのではないだろうか。ホーソーンを初め、アメリカロマンティシズムの作家たちは、女性の主人公を描くときの常套的な方法として2人の対照的な女性を登場させた。情熱的で、男性にまわりつき、男性を駄目にしてしまう運命の女、“Dark Lady”（黒髪、黒い瞳、黒い肌）、そして控えめで男性を支える天使のような“Fair Lady”（金髪、青い瞳、白い肌）である。

カヴァディルが心から恋した相手は、ゼノビアであることは、誰の眼にも明らかであるのに、何事にも打ち込めないカヴァディルは、恋愛においても、ゼノビアのような運命の女と関わることを避けたのだ。このように意気地のない自分を正当化するために、最終章で、“I-I myself-was in love-with-Priscilla!” (228) ともったいぶった言い方で読者に告白する。

Samuel Chase Coaleは、このような状況にあるカヴァディルについて次のように分析している¹¹⁾。

Coverdale is drawn to Zenobia, but he must cling to the sentimental domesticity of the pallid Priscilla, the medium of the day, the vapid ghost for whom he can admit his passionless love.

確かに、カヴァディルが愛を告白したプリシラへの気持ちは、情熱的ではない、退屈なものに達しない。

魅力ある女権拡張運動家のゼノビアは結局、失恋の痛手が主な理由として入水自殺をする。しかし、長妻由里子は、「ゼノビアがもっとも力をもつのは、彼女が死に、身体の重圧から解放されるときである。ゼノビアは死の直前、……自らを表象させていた花の飾りを自分の手ではずす。これは彼女がもはや男性の視線によって作り上げられた女として機能することを止めた合図だ。」(20) と言い、死によってゼノビアが自由になれたと言う。ホーソーンが、ゼノビアの死をどのような目的で描いたのかは定かではないが、19世紀の中葉という時代は、ゼノビアのような女権運動拡張家にとって生きにくかった時代であることはまちがいない。

稲垣伸一は、BRを「医療改革とメスメリズム」の観点から論じて、BR中のハイドロパシー（水治療）について注目している。そして、ゼノビアの持つフェミニズム思想が、ハイドロパシーが持っていたフェミニズム的要素と一致するという興味深い分析をしている。さらに、カヴァディルもまた、「このようなフェミニズム思想を共有しており、ブライズデイルに到着した晩、彼は食事の支度が女性の仕事であることに違和感を覚え、早くも批判的な視線をその共同体に投げかける」と述べているが、的を射た指摘である¹²⁾。また、稲垣は、「BRにおける女性の表象から導き出せるのは、「家庭の理念」とフェミニズムを含む社会改革思想との間に立つホーソーンの矛盾する姿である」(44) と述べて、作者がBRにおいて矛盾した姿を呈示していることを主張している。

実際、語り手カヴァディルと同様にホーソーンはBRの中で「はっきりできない」矛盾した状況に陥っているように思われる。このことが、BRを訳のわからない作品にしまい、批評家たちから酷評されることになったのではないか。したがって、語り手のカヴァディルとホーソーンを比較することで、BRの本質に迫りたい。

4) ホーソーンとカヴァディル

ホーソーンは、J.T. Fields宛の手紙で“All women, as authors, are feeble and tiresome. I wish they were forbidden to write, on pain of having their faces deeply scarified with an oyster-

shell”¹³⁾ 言って、女性の物書きへの嫌悪感を顕わにする。確かにセンチメンタルな感傷小説を書いていた女性作家に比べ自分は人間の心理に迫る純文学を書いているという自負があっただろう。しかし、既に述べたように、女性作家たちの小説の売れ行きは圧倒的に勝っていたので、ホーソーンは、彼女たちへの嫉妬心を抑えることができなかったのである。

また、彼の心を穏やかにしてはくれないものが他にもあった。それは、当時の女権運動であり、マーガレット・フラーのような新しい女性の活躍である。実際、ホーソーンがこのような女性を快く思っていなかったであろうことは、17世紀の女性の指導者、Ann Hutchinson (1591-1643) について、記した“Mrs. Hutchinson”というスケッチを執筆していることからもうかがえる。佐藤宏子は、「ホーソーンは、十七世紀に男性が支配する植民地の安定を脅かしたハッチンソンと、十九世紀半ばのアメリカの文壇に出現し、男性作家たちの市場を侵害しはじめた女性作家たちを重ね合わせているのだ」(22) とホーソーンを批判している。佐藤は、ハッチンソンは魅力的に描かれてはいるものの、ホーソーンの共感は、「彼女の側にあるわけではない」と断言する。しかし、*BR* におけるゼノビアは、余りに魅力的で、女権拡張運動家としての主張や苦悩も見事に描かれており、少なくとも*BR*においては、ホーソーンの共感ゼノビアの側にあるように思われる。

倉橋洋子は、ホーソーンが、「文化や哲学に囚われた男性作家には真似のできない女性作家の『幼稚』ではあるが自由な文筆活動に対して、非難と同時に不安や羨望を表明している」(3) と述べて、ホーソーンのアンビヴァレントな態度について言及している。2人の女性の間でアンビヴァレントに揺れ動く語り手カヴァディルと同じく、ホーソーンも心が様々に揺れ動いている。丹羽隆昭は、ホーソーンとカヴァディルの相関性について次のように述べている。

ホーソーンが、物語を語るカヴァディルなる登場人物に結晶させてしまったものは、かくして、社会倫理を慮って書きたいものが書けなくなってしまうことへの作家の恐怖に違いない。カヴァディルという、自分によく似た立場、性格の語り手を通して、ホーソーンはまた新たな恐怖のカタルシスを果たした……つまり、また新たな「恐怖の自画像」を一枚書いてみた——のではなからうか。初めて読むと訳が分からないとさえ言える奇妙な作品『ブライズデイル・ロマンス』が、いったい何についての物語なのかと問われれば、それは結局のところ、ホーソーンにおける「許されざる罪」という主題の重さ、複雑さを思わず知らず作家が告白している物語だと言えようか。(下線、丹羽)¹⁴⁾

丹羽の言うように、カヴァディルは、紛れもなくホーソーンの分身である。そして、ホーソーンは女性作家たちへの羨望と嫉妬心、フラーを初めとする女権獲得に奔走する強く先進的な女性たちへの反発と憧れにも似た感情に揺れ動いている。倉橋洋子が指摘しているように、ホーソーンは、カヴァディルの発言を通して、「女性の政治と宗教への参入、女性の社会進出が考えられうる」(4) ということを示した。まさに、ホーソーンのような女権運動への寛容な応援者がいたからこそ、20世紀には、女性の権利を獲得することができたのだ。

しかし、*BR*では、ホーソーンの女権運動に対して、応援しながらも、全面的には賛成しないというようなアンビヴァレントな様子も描かれている。それは、マーガレット・フラーをモデルにしたと思われる女権運動の指導者であるゼノビアは、男性優位主義者の権化のような存在のホリングズワスの前では、何を言われても反論することさえしないで口を閉ざしてしまうことである。恋する相手には反論できないというような中途半端な態度である。これは、ホーソーンが女権運動の闘士であるような強い女性に惹かれ、彼女達の主張も十分好意的に受け入れる姿勢がある一方で、19世紀中葉を生きた男性の一人として、伝統的な男女の役割に対しても守っていきたいという気持ちの間で揺れていたためではないだろうか。

ケイス・カラバインは、ホーソーとカヴァディルの関係について次のように述べる。

I think it is a mistake, however, to think that, because Coverdale is treated in part as a comic figure, who is reluctant even to tell the story, and who doubts his fitness for the task, that therefore he is not to be taken seriously. Rather I would stress that Hawthorne has also invested in Coverdale (in his only novel which grew out of a shared experience with friends and associates) his deepest feelings and perceptions concerning the place and responsibility of the artist in relation to his fellow men and to society at large. Through Coverdale he ponders the right of the artist to treat and remold communal human experiences. (186-187)

カラバインの言うように、BRは、ホーソーが実体験から得た、様々な人間関係を芸術作品としての小説にどのように反映させようかという葛藤が示されている点においても注目に値する作品である。

ホーソーは、BRの序文で、“……had this Community [Brook Farm] in his mind” と実際の体験を基に執筆したことを認めながらも、G.W.Curtis 宛の手紙では、“Do not read it as if it had anything to do with Brook Farm……” (手紙 569) と言って、すぐにそれを否定する。しかし、妻となるSophia へも、ブルックファームに到着してすぐに風邪を引いたという手紙 (534) を出していることから、ブライズディルに到着してすぐに風邪を引くカヴァディルを始めとして、実験農場での体験をモデルにしていることは明らかである。

また、魅力的な女性ゼノビアが実験農場に参加したマーガレット・フラーであることも確かである。倉橋洋子は、ゼノビアの自殺を、ホリングズワースに象徴される「家父長制の前に挫折」(9) したと述べるが、フラーの乗船した船が難破して彼女は事故死したが、遺体は見つかっていないとい史実に基づいている。Thomas R. Mitchell の、*Hawthorne's Fuller Mystery*というホーソーとフラーに関する大著によれば、実際のフラーは、“Fuller was supposedly just too ‘plain’ to inspire the erotic imagination of Hawthorne.”¹⁵⁾ と、全く魅力的ではなかったようである。

ホーソーは、実験農場での実際の体験を基にして、そこで共に暮らした仲間たちをモデルにしてロマンスを描いた。既に述べてきたように、登場人物の中で最も印象的で魅力的な女性はゼノビアである。彼女は、ホーソーがブルックファームで会ったフラーをモデルにして、実際のフラーよりもはるかに魅力的に描いているのだから、ここにホーソーが女権拡張運動家の女性たちを秘かに応援していた姿を垣間見ることができる。

このようなホーソーの女権拡張運動に対する応援する心や寛容の精神は、「真の女性らしさ」神話が蔓延していた19世紀中葉の時代においては稀有な立場にあったと言える。このような広い受容の精神があったからこそ、彼は、幾つもの魅力的な作品世界を読者に提示することができたように思われ、改めてホーソーの魅力を知れるという点でBRは、三流作品ではなく、一流の作品なのであり、現在も多く批評家たちの研究の対象で有り続けている¹⁶⁾。BRの出版から1世紀も経ての1960年代になって初めて女性やアフリカ系アメリカ人のような差別され続けた人たちが女権や市民権を獲得するための本格的な運動が始まった。このような動きの100年も前から女権運動に対して暖かい眼差しを向けたホーソーの人間としての魅力を再確認することができた。

注

- 1) 大井浩二、『ホーソー論：アメリカ神話と想像力』(1974年、南雲堂)。176-177頁に、BRを三流作品と酷評した研究者名が挙げられている。以下、本書からの引用は、著者の名前と頁数を記す。

- 2) Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance*, A Norton Critical Edition, ed. By Seymour Gross and Rosalie Murphy (New York: W.W. Norton & Company, Inc., 1978), 7. 以下、本書からの引用は、文中の括弧内にその頁数を記す。
- 3) 諏訪部浩一、「ダーク・レディの死とロマンスの死——『ブライズデイル・ロマンス』におけるカヴァデイルのナラティブ」『アメリカ文学』（日本アメリカ文学会東京支部会報）第65号、（2004年 6月）、6頁。
- 4) Keith Carabine, “‘Bittter Honey’: Miles Coverdale as Narrator in *The Blithedale Romance*,” in ed. and with an introduction by Harold Bloom, *Nathaniel Hawthorne*, (New York: Chelsea House Publishers, 1986), 179. 以下、本書からの引用は、著者の名前と頁数を記す。
- 5) Nina Baym, “*The Blithedale Romance*: A Radical Reading” in *The Blithedale Romance*, Norton Critical Edition, 352. この論文は、*Journal of English and Germanic Philology*, 67 (1968), 545-69からノートン版に入れられたもの。以下、本論文からの引用は文中の括弧内に、筆者名とその頁数を記す。
- 6) 長妻由里子、「『ブライズデイル・ロマンス』における視線とジェンダー」、『フォーラム』（日本ナサニエル・ホーソン協会会報）第8号、（2002年 4月）、22。長妻は、カヴァデイルが、ホリングズワースとの影響関係においては、女性化していると述べている。以下、本論文からの引用は、文中の括弧内に、筆者名とその頁数を記す。
- 7) Carroll Smith-Rosenberg, *Disorderly Conduct* (New York: Oxford UP, 1985), 13. 同書からの引用は、文中の括弧内に、筆者名とその頁数を記す。
- 8) 倉橋洋子、「『新しい女性』への道——『ブライズデイル・ロマンス』におけるゼノビア」、『フォーラム』（日本ナサニエル・ホーソン協会会報）第7号（2001年 4月）、3。以下本論文からの引用は、文中の括弧内に筆者名とその頁数を記す。
- 9) Philip Rahv, “The Dark Lady of Salem,” *Partisan Review* 8 (1941) : 377.
- 10) 佐藤宏子、『アメリカン・ガールの形成』、（2002年 4月）、暮しの手帖社、11。佐藤は、アメリカン・ガールの特徴として「健康で肉体が逞しい（sturdy）」こと、「自立（self-reliance）と自助（self-help）が個人の価値を決めるアメリカという国家で育てられてきた」ことなどを、挿絵画家のHoward Chandler Christy (1873-1952) の著書、*The American Girl; as Seen and Portrayed by Howard Chandler Christy* (1906) を参照しながら、紹介している。
- 11) Samuel Chase Coale, *Mesmerism and Hawthorne: Mediums of American Romance* (Tuscaloosa, Alabama: The University of Alabama Press, 1998), 117.
- 12) 稲垣伸一、「*The Blithedale Romance*における医療改革とメスメリズム」、『アメリカ文学』（日本アメリカ文学会東京支部会報）第63号（2002年 6月）、40頁。
- 13) *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* Volume XV *The Letters*, 1813-1843, ed. By Thomas Woodson, L. Neil Smith, Norman Holmes Pearson (Ohio: Ohio State UP, 1984), 624. 以下、「手紙」として、その頁数を記す。
- 14) 丹羽隆昭、『恐怖の自画像——ホーソンと「許されざる罪」』（英宝社、2000年）、227。以下、本書からの引用は、文中の括弧内に、筆者名とその頁数を記す。
- 15) Thomas R. Mitchell, *Hawthorne's Fuller Mystery*, (Amherst: University of Massachusetts Press, 1998), 213.
- 16) 例えば、日本では、西前孝が、BRを「酒・タバコ・飲食」そして「金・遺産（財産）・物欲」という視点から本書における欲望の実態を検討している。
西前孝、「欲望のレトリック——『ブライズデイル・ロマンス』を読み直す」『フォーラム』（日本ナサニエル・ホーソン協会会報）第9号（2001年 4月）、19-37。